

中共一全大会存疑

(東京大学) 丸山 松幸

中共第1次全国代表大会については、すでに多くの論証が行われていて、かなり明確にされてきたが、細かな資料をつきあわせてみると、まだ疑問の点が多い。以下は、その覚書である。

毛沢東が共産党創立大会についてエドガー・スノウに語った回想のなかで、「この組織で指導的な役割を演じたのは陳独秀と李大釗であり、両者とも中国の最も聡明な知識人指導者でした」⁽¹⁾と述べているように、「南陳北李」はまぎれもなく党創建の中心人物であった。にもかかわらず、この二人はそろって大会に出席していない。二人の不参加の理由については、多くの回想が、李は北京大学の校務が繁忙であったため、陳は前年12月末に就任した広東教育委員長の職務で手が放せなかったため、としている⁽²⁾。それはおそらくその通りだったに違いない。しかし、李は夏休みの後半になれば多少の時間的余裕も生じたであろうし、陳もその年の9月には上海に帰って党務に専念したのであるから、その頃に大会を開いても決して遅くはなかったはずで、どうしても7月に開かねばならない理由は見当たらない。

もちろん、各地の共産主義者のグループがすでに活動しており、建党の機運が生まれていたのは事実であった。李達は、1921年2月頃に陳独秀と李漢俊との間で新たに組織すべき党の党章草案をめぐる激しい手紙のやりとりがあったと言い、張国燾は「1921年4月、われわれ（中国共産党の主要発起人たち）は各地の工作が好スタートをきっており、党を組織する時機が成熟していると感じた。上海、北京、広州の同志が手紙で相談した結果、6月中旬に上海で中国共産党第一次全国代表大会を挙行することを決定した」⁽³⁾と書いてい

る。しかし陳・李が出席できない時期に大会が設定されたことは、内部からの自発的なものというよりは、やはり外部＝コミンテルンの働きかけのほうにより強かったことを思わせるのである⁽⁴⁾。

- (1) エドガー・スノウ『中国の赤い星』（松岡洋子訳、筑摩書房、1975年）107頁。
- (2) 李の不参加の理由として他のことを挙げるものは、羅章竜「亢斎回憶録」（「回憶李大釗」人民出版社、1980年）が「当時激しく進められていた索薪闘争を指導するため」としているほか、劉仁静「一大瑣憶」（内部発行『一大回憶録』知識出版社、1980年）は、李は大先達であり、組織活動について一々彼を煩わすことがなかったので、代表選出のときも相談しなかったのだ（このことは、北京グループのこの会議に対する認識—後述—とも関連する）としている。なお、秦德君「回憶李大釗鄧中夏憚代英」（『五四回憶（上）』373頁）は少年中国学会主宰のためとしているが、この文章は記憶に甚だしい混乱があって、事実を確定するにはあまり参考にならない。この混乱を指摘したものに、『光明日報』1981年2月10日の俞興茂の記事がある。

陳の不参加の理由に関する諸説については、鄧文光『中共建党運動史諸問題』（香港・青騰出版社、1976年）107頁以下参照。

なお、前述の内部発行『一大回憶録』には、以下の文が集められている。これらの大部分は他の回想集や資料集にも収められているが、特に注記しない場合はこの回憶録の文章である。

毛沢東「与埃德加・斯诺的谈话」
 董必武「与尼姆・威尔斯的谈话」
 陳潭秋「回憶党的一大」
 李 達「中国共産党的發起和第一次・第二次代表大会經過的回憶」
 包惠僧「党的一大前後」
 劉仁静「一大瑣憶」
 張国燾「中国共産党第一次全国代表大会」
 周仏海「扶桑笈影溯当年」
 陳公博「我与共産党」
 馬 林「赴華回憶」

〃 「給共産国際執行局的報告」
 「中国共産党的第一個綱領」
 「中国共産党的第一個決議」

- (3) 張国燾『我的回憶』（香港・明報出版社，1971年）133頁。
- (4) 「一大代表包惠僧訪問記錄」（『上海師範学院学報』1979年2期）によれば，1921年5月頃，李漢俊が広州の陳独秀に対して，党中央を広州に移すか上海に帰って党工作を主宰するように書信で要請して来たのに対し，陳は「中国革命は長期のもので，ゆっくり一步一步やればよい」と言っていたという。

I 大会開催までの経緯

1920年8月にコミンテルン駐華代表に指名されたマーリン（スネフリエト）は，イタリア汽船アキラ号で1921年6月3日に上海に着いた。前後してコミンテルン極東書記局代表ニコルスキー，プロフィンテルン代表フレムブルグも到着して（中国側文献はすべてニコルスキーをプロフィンテルン代表としている），本格的な組織工作が開始された。

マーリンはまずモスクワでこの年6月22日から開かれるコミンテルン第3回大会に張太雷を中共代表として派遣するとともに，早急に全国大会を

開いて中国共産党を正式に成立させるよう働きかけた⁽¹⁾。包惠僧によれば，マーリンとニコルスキーはまず北京に行き，李大釗，張国燾らと幾度か会談して全国的な建党会議召集を提案，北京の同志はこれに同意して，張が同行して上海に行った⁽²⁾，ということで，『李大釗伝』（人民出版社，1979年）の記述もこれを踏襲しているが（ただし上海に同行したのは鄧中夏となっている），当事者である張国燾や羅章竜の回想には，この事実がでていない。当時包惠僧は広州にいたのだから，誤った伝聞に基づいたものではないか。マーリンの回想と報告にも北京行きは書かれていない。この回想と報告によれば，マーリンの主たる関心は共産党の創立・強化よりもむしろ孫文の国民党との提携にあり（極東書記局と極東共和国はソ連の利益という観点から呉佩孚との提携を考えていたが，マーリンはこれに反対だった），わざわざ北京まで行ったとは考え難いのである。中国社会科学院現代史研究室の編んだマーリン在華資料に基づいた姚維斗・丁則勤「馬林在華活動紀要」⁽³⁾は明確に北京行を否定している。

当時上海の「共産党」をあずかっていたのは李達と李漢俊であるが，彼らがイニシアティブをとって大会召集を決定したとは到底考えられない。マーリンの建議に基づいておそらく陳独秀と相談したのであろうが，陳は前述したように広州を離れることができなかった。コミンテルン文書「中国共産党第一次全国代表大会」（張国燾）によれば，大会は当初6月20日に召集する予定であったが，各地代表の参集が遅れ，7月23日ようやく全員が上海に到着して開幕したのだという。マーリンが6月3日に到着して（これはオランダ外務省文書で確認されている）それから各地の組織と折衝し，6月20日召集を確定して通知するということは，当時の交通・通信事情から考えて，絶対不可能である。しかもマーリンはほとんど中国の事情を知らず「上海で全くの第一歩から出発しなけ

ればならなかった」(回憶)のであるからなおさらである。

考えられることは、

1. 張国燾の言うように、マーリンの到着以前にすでに各地の組織間で6月中旬召集が決定していた。
2. 中国共産党の正式成立を急ぐマーリンが強引に期日を押しつけたが、中国側がついていけず、1カ月以上も遅れることになった。
3. 6月20日というのは確定した期日ではなくて単なるメドあるいは事後の付会に過ぎず、あまり意味のあるものではない。

であろう。第1の張国燾の説は無理がある。共産主義グループのメンバーの大部分が大学関係者であるにもかかわらず、学校が最も忙しい6月中旬に大会を設定するとは考えられない。もっとも張国燾は大会開幕を7月1日としているため、すべての日付がそれに合わせて約1カ月繰り上がっている。彼は大会の準備工作のため「だいたい5月中旬頃」に上海に行き、すぐ李達と李漢俊に会い、2日後張太雷とともにマーリンに会った、と記しているが、前述したように、マーリンの上海到着は6月3日であるから、明らかに誤りである。これがかりに1カ月ずらした「6月中旬」であるとすれば、そもそも「6月20日の予定」が成り立たないし(彼は準備工作にかなりの時日を要したことを書いている)、またマーリンの工作もかなり進んでいたはずで、完全な自発的決定とはいえない。

第2のマーリンの態度であるが、これはかなり高圧的で、指導者意識を露骨に示していたらしい。張国燾によれば、李達はマーリンのことを「この洋鬼子はとても傲慢で、話ができない」と言い、また李漢俊から聞いた第1回会談の内容として、マーリンはコミンテルンの正式代表であることを振りかざして全く無遠慮に工作報告を要求し、また工作计划と予算をたずねて経済援助を申し出た、

と述べている。これが「コミンテルン代表は顧問に過ぎず、自ら指導的地位に立つべきでない」とする李漢俊らの自主路線と真向からぶつかりあい、感情的なもつれもあって、李達は「彼との衝に当たりたくない」と言いだすほどであった。行き詰まったマーリンは陳独秀、李大釗、張国燾に会うことを切望しており、張が会ったときはさすがに態度を改めていたという。

こうした行き違いが大会準備の順調な進展を妨げたであろうことは容易に想像できる。しかしマーリンにしても中国への出発にさいして「特定の訓令」を受けていたわけではなく、しゃにむに結党を急ぐ必要はなかった。彼にとって共産党創立は民族主義勢力(国民党)と提携するための手段に過ぎず、それ自体にはたいして期待はかけていなかったのである。

とすればコミンテルン文書「中国共産党第1次全国代表大会」が、わざわざ「6月20日」という実現しなかった「予定日」を書き加えたのはなぜだろうか。私の推測では、コミンテルン第3回大会(6月22日-7月12日)に党代表を送ったことと辻褃を合わせるためだったように思われる。張太雷は第3回大会の最終日に中国共産党を代表して短い演説を行っている⁽⁴⁾。もしこの時まででに党が結成されていなければ、張の資格が宙に浮くことになる。「6月20日」というのは、それを避けるための架空の日付だったのではなかろうか。

とはいえ大会の開催が当初の予定(おそらく7月上旬)より大幅に遅れたことは確かのように思われる。毛沢東と何叔衡が長沙を出発したのは6月29日で、謝覺哉の回想によれば彼らの行動は突然であったという⁽⁵⁾。おそらく至急の召集を受けて、黨員会議にもかけずに出発したのであろう。彼らは船で長江を下り、まっすぐ上海に行っている(到着は7月4・5日頃)。当時順路に当たる南京では少年中国学会の年会(7月1-4日)が開かれていた。もし召集通知から開幕予定日まで

いづれか余裕があったとすれば、会員である毛沢東がこの機会を利用しないはずがない（北京代表の劉仁静は7月2日からこの会議に出席し、そのあと上海に向かっている）⁽⁶⁾。召集通知がかなり切迫したものだったことを推測させる。

北京では、この大会の意義をほとんど理解していなかったようである。羅章竜は前掲文のなかで「1921年の夏休み間近のころ、われわれは上海方面から、人を送って会議に参加するようにとの通知を受けた。われわれは会議の性質が後に知ったあのような全党の成立大会であるとは知らなかった（原文は不如であるが不知の誤植であろう）」と回想しているし、劉仁静も「誰も重大な歴史的意義をもつ会議に出席するのだと考えたものはいなかった」と述べている。北京支部ではただちに会議を開いて（李大釗は出席せず）人選を行った結果、張国燾と劉仁静が代表に選ばれた。しかし、その経過について、羅は、すでに上海に行っていた張と少年中国学会に出席予定の劉を推薦したとしているが、劉は、第一代表としてグループの中心人物だった張がまず選ばれ、第二代表は鄧中夏か羅章竜が当然であったが、二人とも遠慮深くて辞退したため、19歳の劉にお鉢が回ってきた、張国燾はそれから上海に出発したのだという。いづれにしても、かなり便宜的な人選で、準備もほとんどしないままに参加したのは間違いない。

しかし当時この通知を広州で受け取った包惠僧は、党創立大会の通知だったことを確言している。「ある日陳独秀がわれわれを譚植棠の家に召集して会を開き、上海の李漢俊から手紙が来たこと、その内容は、コミンテルンとプロフィンテルンが二人の代表を上海に送って来て中国共産党の発起会を召集しており、陳独秀は上海に帰り広州支部は二人の出席者を派遣してほしいということで、別に200元の旅費を送ってきた、と話した⁽⁷⁾」。また同じく広東代表の陳公博も「私は去年上海で一つの学社を結成したが、この時期に未完の手続

きに締め括りをつけようと思って」と、ぼかした表現ながら創立大会参加のために上海に行ったことを認めている。大会の受け止め方が地方によって大きな違いを見せていることは、注目すべきである。長沙の毛沢東、北京の劉仁静が6月下旬急いで出発したのに対して、広州の陳公博の出発がずっと遅れて7月14日だったことから、通知の内容が、あるいは地方によって異なっていたのかも知れない。李漢俊らは、他地区代表が参集して来た時期になってもなお陳独秀出席の希望を棄てず（その理由はたぶん大会をマーリンの言うままにしたくなかったからであろう）、繰り返し来滬を促したが、陳公博が陳独秀の書簡と意見書を携えて来た段階で、ようやく開幕に踏み切ったものと思われる。

- 1 Dov Bing "Sneevliet and the Early Years of the CCP" *China Quarterly* No. 48 (1971) p. 680.
- 2 棲梧老人「中国共産党成立前後の見聞」（『新観察』1957年13期）。この筆名は初め董必武であろうと推測されていたが、これを最初に包惠僧であることを論証したのは、鄧文光の前掲書である。
- 3 『北京大学学報』1980年3期。
- 4 向青「中国共産党創建時期的共産國際和中国革命」（『近代史研究』1980年4期）。
- 5 謝覺哉『謝覺哉雜文選』（人民文学出版社、1980年）330頁。なお、『謝覺哉日記』（人民出版社、1984年）49頁には「赴全国○○○○○之招」と書いてあるが、回想では「中共全国大会に参加したのだということは、あとになって知った」と述べていて、食い違っている。
- 6 『五四時期的社團（一）』（三聯書店、1979年）353頁。
- 7 邵維正「中国共産党第一次全国代表大会召開日和出席人数的考証」（『中国社会科学』

1980年1期)所引の「我所知道的陳独秀」による。

- 8 陳公博「十月旅行中の春津浦」(『新青年』第9巻3号)。

II 会期について

中国共産党第一次全国代表大会は正規の文献記録が残っていない。そのため大会の内容はすべて出席者の回憶にたよらざるをえず、相互間の食い違いが多くて、会期、出席者、決議内容のすべてに不明確な点が残されている。前掲の邵維正の論文は、綿密な調査と考証によって会期と出席者を確定しようと試みたもので、その結論は、

会期——1921年7月23—31日

出席——13人。毛沢東、何叔衡、董必武、陳潭秋、

王尽美、鄧恩銘、李漢俊、李達、張国燾、

劉仁静、周仏海、陳公博、包惠僧。

で、これはすでに党機関紙など⁽¹⁾によって公認されており、今後の党史はこの結論に基づいて記述されることになるだろうが、なお残された問題をいくつか指摘しておきたい。各回憶録の記述は細かな比較検討はすでになされているので⁽²⁾、ここでは省略する。

党の創立が7月1日(および陳公博のいう7月20日)でないことは、早く1969年に鄧文光が明らかにしている。7月1日という日付は、1941年に建党20周年の記念活動を行うさい、抗戦中で確かな月日は調査できなかったが7月であったことは確実なので、その最初の日を建党記念日と定めたものに過ぎないという(邵維正)。それ以前にも例えば毛沢東が「論持久戦」(1938年5月)のなかで7月1日を建党記念日としているから、もっと遡ることができるだろう。

鄧文光は仮説として7月23—28日を挙げているが、これはその根拠とした『新觀察』記者の「〈七一〉前夕訪南湖」(1956年13期)の記述を読み誤っており(船頭の言葉として「夏曆6月24日す

なわち7月28日に遊覧客が多い」というのは一般の状況を述べたもので、この日に最終会議が開かれたといっているのではない)、その付記にプロフィンテルン駐チタ代表の報告文書に「7月23日」と記載されていることを後になってソ連の学者から知らされたと記しているが、これは偶然の一致に過ぎない。この「報告文書」というのは、おそらく前掲のコミンテルン文書「中国共産党第一次代表大会」と同系統のものであろう。邵維正が決め手としているのもこのコミンテルン文書である。そこには、

7月23日開幕

第二次会議のあと2日間休会

第6次会議の日に警察の家宅搜索

そのあと近くの小都市に会場を移す

と記されている。

この会期のうち、客観的な資料で日付が確認できるのは家宅搜索を受けた日で、これは7月30日である。この夜(正確には31日未明)陳公博の宿泊していたホテルの隣室で殺人事件があり、陳は関わり合いになることを恐れて翌日杭州に旅立ったため、南湖での最終会議に参加しなかった(劉仁静によれば、李漢俊、マーリン、ニコルスキーも出席していない)。この事件は中国には珍しい心中未遂だったため当時の新聞に大きく報道されており、また新妻を連れ蜜月旅行を兼ねて大会に出席していた陳公博が大いにあわてたことは各回憶が記しているので、ほぼ間違いない。そして前記文書の記述を追ってゆくと、第6次会議がびったりと7月30日に一致する、というのが邵維正の結論なのである。

閉幕日すなわち南湖会議は翌日とするものと翌々日とするものが分かれている。会場を設営した王会悟(李達夫人)は、いずれとも明言はしていないが「董必武、陳潭秋、何叔衡とともに一番列車で嘉興に行った」と書いているところを見ると、翌日の可能性のほうが大きい。藤田正典氏は8月

1日は南湖で突風が吹き荒れ、4、5艘の遊覧船が沈没したという『申報』の記事から、翌々日説は成り立ち難いという⁽³⁾。

問題は、7月23日がはたして正式の開幕であったのか、という点である。陳潭秋は「博文女学校の2階で開会式を行い、正式会議は李漢俊の家で開かれた」もので、大会は4日間にわたって行われたと書いており、包惠僧、陳公博も搜索された日を「第4天」すなわち開会から4日目としている（周仏海は「扶桑……」では「第4晩」，「逃出了……」では「第6晩」としている。また張国燾は8日目といい、開幕の場所を博文女学校とする）。これらを総合すれば、

7月23-26日 博文女学校で準備会議

7月27-30日 李漢俊家で正式会議

7月31日 南湖で最終会議

というのが妥当なところではなかろうか（張国燾は李漢俊家で開かれたのは最後の日だけだったというが、思い違いであろう）。包惠僧によれば、開会冒頭にマーリンが英語で長い演説を行ったというから、多くの出席者がこの27日を正式開会としているのは当然である（もっとも劉仁静はマーリンの長大な演説を否定し、もしそんなことがあれば自分が通訳したはずだ、という）。陳潭秋のいう「開会式」も改まったセレモニーが行われたとは考え難く、単に準備会議の始まりを告げるものだったのではないか。これを大会の開幕日としたのは、私の推測では、コミンテルン文書の筆者（張国燾）が「6月20日開幕予定」とした関係から、できるだけそれに近づけようとした結果であると思われる。邵維正が、搜索を受けた日が大会の4日目であったという、多くの回憶が一致している点について全く触れていないのは不可解である。

ついでに会場のことに触れておく。現在上海市廬湾区にある記念館には当時を復元した部屋が1階にしつらえられている。陳公博、包惠僧、陳潭

秋、王会悟のいずれも2階で会議中に密偵に覗きこまれ、すぐに散会したと回想しているが、劉仁静は、会議はいつも1階で開かれていたが、開会前に李の寝室や仕事部屋で休んだり雑談したりしているときに密偵が来たのだという。

(1) 「党的“一大”代表究竟多少人」（『人民日報』1980年1月2日「党史資料」欄）および「党的誕生日應為7月23日」（『北京日報』1980年10月29日「黨員須知」欄）。

(2) 邵維正前掲文、鄧文光前掲書および章芝「關於中共“一大”代表人数問題」（『光明日報』1980年1月22日）。

(3) 「中国共产党第一次全国代表大会の参加代表、会期について」（『近代中国』第8巻、1980年10月）。

III 出席者について

従来、大会の出席者で疑問符が打たれていたのは包惠僧と何叔衡である（周仏海は共青の丁黙村も挙げているが）。毛沢東はスノウに語った回想および九全大会開幕の講話のなかで、出席者は12人で何叔衡を含むと語っており、包惠僧の名は挙げていない。私は1978年に記念館を訪れたさい包について質問したところ「彼は出席はしたが正式代表ではなかった」との答えで、展示してある代表名簿は地区別ではなく九全大会毛講話に出てくる順序に並べてあった。当時はまだ毛沢東の言葉を公然と訂正することはできなかったのであろう。包惠僧が湖北の人でありながら広東代表として出席した経緯についてはすでに明らかにされており⁽¹⁾、正式代表であったことはほぼ確実である（ただしとつ疑問なのは、陳公博が回想のなかで包について「在那時認識的」と言って、広東では面識がなかったように述べていることである）。

何叔衡が「マルクス主義を理解しておらず、工作実績もない」という理由で代表資格を認められなかった、というのは張国燾の回憶にだけ出てく

ることで、邵維正のいうように「12名説に付会するため」に作った話として無視してよいのかも知れない。しかし全く何もないところからこのような「付会」が出てくるものであろうか。張国燾は「私からこのことを毛沢東に通告することになった。毛はただちに、湖南のある工作が緊急であることを理由にして、何叔衡に、先に湖南に帰って処理するように請うた」と書いている。いつくかの回憶によれば、張は大会の議長に選ばれ、マーリンとの親密な関係もあって独断専行が目立ったという。この資格審査問題も、あるいは張の独断だったかも知れないのである。毛沢東が何叔衡を傷つけまいとして、本人にも周囲にも気付かれないように事を運ぶということは、いかにもありうることに思われる。

邵維正は、第一次大会で資格の審査はありえないと言っているが、コミンテルン文書のひとつである「中国共産党宣言」にはロシア語に訳した訳者（署名はChang=張太雷？ 日付は1921年12月10日）の付記があり、「この宣言は中国共産党が去年11月に決定したものである。この宣言の内容は共産主義の原則の一部分に過ぎず、したがって外部には発表していないが、これを党員収納の基準としている」とあり、また当時はいくつもの党章の草案が作られていたという⁽²⁾。大会で自信満々マルクス・レーニン主義者を自任していた張国燾から見れば、村夫子然とした何叔衡はいかにも共産主義とは無縁の旧式読書人と映ったに違はなく、これらの党章を振りかざして締め出しを画策したとしても決しておかしくはない。また、大会開幕前に博文女学校で起居をともにした人々にとって何叔衡は異色の人物として強い印象を与えたであろうから、彼らの回憶に「出席者」として記録されたとしても別に不思議ではない。「13人参集、12人出席」ということも可能性としては十分残されているのである。

「13人出席」説をとる邵維正にとって、会期の

問題で決め手にしたコミンテルン文書が「大会に出席したのは12名の代表がいた。7つの地方から来たもので、2つの地方が代表1名、5つの地方が代表2名」と明記している点が最も苦しいところで、「文中にいう12名の代表とは“7つの地方から来た”代表を指し、その他に13人目の会議参加者がいた可能性を排除するものではない」として、包惠僧が「広東代表」でなく陳独秀の「指名派遣」であったと推測して、この文書との折り合いをつけている。これは論理的にいささか無理があるだけでなく、日本（留学生）とともに1名しか代表を出さなかった地方を「広東」と決めてかかっている点が問題で、何叔衡を除いた「湖南」であった可能性も無視することはできないはずである。ましてこの文書の筆者が張国燾であるのだから、なおさらである。

ただし、さきに引用した王会悟のいうように、南湖の会場設営のために先発したメンバーのなかに本当に何叔衡が加わっていたとすれば、少なくとも「先に湖南に帰した」事実はなかったことになる。12人説、13人説、包惠僧の代表問題、何叔衡の資格問題のいずれもいまは疑問にとどめておく。

（注）

- (1) 邵維正前掲文、および前掲「一大代表包惠僧訪問記録」。
- (2) 周子信「中国共産党創立的歴史史実」（『江淮論壇』1980年5期）。

「李大釗伝記資料覚書（二）」（『東京大学教養学部 人文科学科紀要』第74輯 国文学・漢文学X X I 昭和57年3月25日）より。1991年8月改稿。